5/20付日経新聞

【第三種郵便物認可】

読書

2001.5.20 日経

半歩遅れの読書術

椎名 誠

地域限定本 遠い国へ旅に出た気分

本もまた中央集中化が進んでいて、同時に折々のベストセラー狂奔が相変わらずである。それはつまりどの書店に行っても同じような本が常にどーんと並んでいることでもあり早い話が大きな書店の一か所に行ってしまえば話はすんでしまう、ということになる。

ぼくが大きな書店で楽しむのは既刊本の棚である。そこには新聞その他ハデな広告合戦とは無縁の様々な本が並んでいる。そういうところから思いがけない面白本を見つけ出すと、何だかずいぶん得をしたような気持ちになる。さらに地方の書店に行くとその土地の出版社が出したその土地近辺でしか流通していないような本が結構ある。旅の折にそうした棚をじっくり眺め、思いがけないような地域限定版のこだわり本を見つけたときのヨロコビといったらない。

例えば札幌村歴史研究会編『北のたまねぎ』（北海道出版企画センター、一九九八年）。新千歳空港の紀伊國屋書店の郷土本コーナーでこれを見つけた。文字通り北海道でタマネギを育てた人たちの苦労話が、実際の開拓農家の当事者たちの話でまとめられている。今でこそ肥沃な農業大地北海道も、ほんの少し前はタマネギの栽培が思うようにならなかった時代があり、開拓農家の人々は粗末な道具を使って粘り強く、今では評判のタマネギ、札幌黄を育ててきたのである。

同じように新穂栄蔵著『ストーブ博物館』（北海道大学図書刊行会、一九八六年）もそんなふうにして見つけた。ここには北海道のストーブ発展史と同時に世界の暖房器具の歴史にまで広がるダイナミックな研究概論が綴られている。

無明舎出版編『写真集雪国はなったらし風土記』（無明舎出版、一九八八年）は、貧しいけれど純粋でたくましく、ある意味では日本の黄金時代ともいえる頃の雪国の底抜けにユーモラスな人々の風景を網羅した、歴史書のような心地のいい写真集である。

このような視点で日本のあちこちの書店を眺めていくと、東京で漫然としているだけでは絶対に手に入らないような、タカラモノのような本が結構沢山ある。

例えば先日宮古島で手に入れた下地祥介著『宮古島の民具』（自費出版、一九九八年）などは、ぼくが今書いている小説の発想の強烈なきっかけとなった一冊である。その用具の名称から使い方までまるで別な世界のアレコレを見るようで、どこか遠い国へ旅に出たような気分にさえなる。

（作家）